

学校統廃合と地域社会

——校名，校歌，震災モニュメントに注目して——

相澤 亮太郎

The Local Community and the Reorganization of the School District :
Focused on Renaming of the School, Making a New School Song,
and the Monuments Built in the School

AIZAWA Ryotaro

Abstract : This is a study on the reorganization of the school districts and the local community. Especially, I focus on the renaming of the school, making a new school song, and the monuments made in the school. In 2009, four elementary schools in the northwestern part of Hyogo district, Kobe city, were unified. As a result, Yumeno-no-oka elementary school was established as a new unified one. Education Board of Kobe city and the principal of the school took a big thought for the balance of the four unified schools. Taking a thought for the balance of the four old schools was necessary to avoid the confliction among the former schools.

抄録：本研究は，学校統廃合と地域社会のつながりに関するものであり，とりわけ，新校名，新校歌，震災モニュメントに注目している。2009年に，神戸市兵庫区北西部にある4つの小学校が統合され，夢野の丘小学校が設置された。神戸市教育委員会及び学校長は，統合された4校のバランスに大きく配慮した。そのような配慮は，4校の対立を避けるために必要なものであった。

1. はじめに

学校統廃合ないし学校再編は，明治期から，第二次大戦前後，高度成長期，そして現在に至るまで，繰り返行われてきた。学校の「適正規模」をめぐる統廃合をはじめとして，近年では，人口減少や少子化への対応，耐震校舎建設を名目とした統廃合の事例が各地で見られる¹⁾。

学校は，その組織や運営，通学範囲等が地域社会のあり方と深く繋がっているため，学校が再編される際には，地域社会に大きな対立や衝突がもたらされることがある。とりわけ，校区や学級規模の改編は児童生徒の教育環境に大きな影響を与えるとされ，批判的観点から注目されることも少なくない（たとえば進藤ほ

か：2005）。しかし，たとえば山下晃一（2010）によれば，学校統廃合は，教育環境の改善充実を含む教育的価値を創造するための切実かつ数少ない契機であるという側面も有する。そこで山下は，学校統廃合を捉える際には，①教育的価値の創造と関連づけつつ，地方教育の窮状という状況認識を中核に据えること，②学校批判の時代における学校統廃合の本質的意味を探ること，③学校再編・統廃合が，学校を支える「まとまり」の再構築につながりうるか否かを解明すること，という3つの視座が重要であるとしている。

学校は，教育の場として設置運営されると同時に，地域社会における象徴的な役割や，多様な地域活動の拠点としての役割を果たしてきた。若林敬子（1999）の言葉を借りれば「学校は，地域社会にとって長い間守り育ててきた共有財産であり，精神的支柱であり，

文化的拠点でもある」。たとえば、地方自治体におけるコミュニティ政策の拠点として、地域におけるスポーツや自治活動、防災活動等の拠点としても位置づけられ、活用されている。また「故郷」や「郷土」の構築性を論じる上でも、学校及び校区は重要な役割を与えられてきた（「郷土」研究会：2003，成田：1998）。近代以降、学校と地域社会は深く相互に構築し合う関係を築いてきたと言える。そして、日常的には見えにくい学校と地域のつながりが、学校統廃合を契機に顕在化することがある。

本稿は、以上のような問題意識を基底としながら、兵庫県神戸市兵庫区北西部における 4 つの小学校を統合し、平成 21 年度に開校した神戸市立夢野の丘小学校における新校名の選定過程、新校歌制定、校内に設置された震災モニュメントの移転・再設置の 3 点に着目する。その 3 点には、学校統廃合を進める側である学校及び教育委員会から地元地域に対する配慮が表れている。上述の山下による学校統廃合を捉える 3 つの視座のうち、③の地域的な「まとまり」を意識しつつ、とりわけ本稿では、統廃合を巡る地域への配慮に着目することで、地域社会と学校が相互につながり合う状況を明らかにしていく手がかりを示したい。以下、当時、統廃合の中心となった夢野の丘小学校の初代校長であった田中稔氏（現甲南女子大学総合子ども学科教授）の協力の下、田中氏へのインタビューや関連資料をまとめた上で、考察を加える。なお、学校統廃合の是非を検討することは本稿の課題ではないことを予め確認しておく。

2. 夢野の丘小学校設置までの経緯

神戸市立夢野の丘小学校は、神戸市兵庫区北西部に位置していた夢野小、鶴越小、東山小、菊水小の 4 校を廃止し、平成 21 年度に夢野小学校の跡地に開校した後、平成 23 年度には東山小の校地に新築移転した（図 1 及び表 1 参照）。その過程は、従来の学校統廃合研究が示す事例と比べれば、極めて「スムーズ」に進められた統廃合であると言える。兵庫区北西部の 4 つの小学校が夢野の丘小学校に統合された理由は、児童数の減少により各学年が単学級化している状況や、校舎の老朽化、狭小な学校敷地を是正し、「児童の総合的な教育環境の改善を図る²⁾」ためとされる。

まず、合併に至るまでの各校の状況を確認したい。菊水小は、昭和 2 年に最大 1410 名の児童数、鶴越小は昭和 30 年代前半に最大 2700 名の児童数であった。



図 1 神戸市立夢野の丘小学及び統合された 4 つの小学校校区の位置関係

表 1 各校の開校時期

大正 9 年 4 月	菊水尋常小学校開校
昭和 3 年 4 月	鶴越尋常小学校開校
昭和 33 年 4 月	東山小学校開校（鶴越小・川池小より分離）
昭和 48 年 4 月	夢野小学校開校（鶴越小・名倉小より分離）
平成 21 年 4 月	旧夢野小学校校地に夢野の丘小学校開校（プレハブ校舎増築による仮校舎含む）
平成 23 年 1 月	旧東山小学校校地に夢野の丘小学校移転（新校舎完成による引っ越し）

※「閉校記念誌」⁴⁾より筆者作成

昭和 33 年には、東山小が鶴越小と隣接の川池小から分離開校し、昭和 48 年には鶴越小と隣接の名倉小から夢野小が分離開校した。しかし、平成 20 年には、4 校とも 200 名前後の児童数となり、平成 21 年に夢野の丘小学校に統合された。平成 21 年度開校時の児童数は 710 名であった³⁾。

統合の対象となった 4 校のうち、菊水小と鶴越小は、80 年以上の歴史を有しており、校区に暮らす多くの地元住民にとっての出身校となっているため、学校への愛着や校区ごとの地元意識が強い地域であると認識されている⁵⁾。そのため、統合の過程において最も重視されたのは、各地域への配慮であった。

統合にあたっては、各校の校長や PTA 会長等によって構成される菊水小・鶴越小・夢野小・東山小統合推進委員会（以下、推進委員会）が組織された。これに対応する形で、地域住民側では、各小学校区ごとに整備されてきた「ふれあいのまちづくり協議会」の 4 校の連合体として「兵庫区北西部まちづくり協議会⁶⁾」が組織された。

ふれあいのまちづくり協議会をはじめとした地域住民側は、小規模校の問題点や統廃合については理解しつつも、愛着のある学校がなくなることや、他の校区が優遇されることには抵抗を感じており、田中氏は、その点に対して大いに配慮する必要があると認識していた。当初、教育委員会の担当者が統廃合の説明のために順番に各校区を回ったところ、どの校区の地域に対して最初に情報をもたらすのかという順番について不満が示されたため、各地域の住民が一堂に会する北西部まちづくり協議会の場でまとめて説明を行う形になった。その結果、校区間の競合意識が表面化することは少なくなり、統廃合の説明はスムーズに進むこととなったという⁷⁾。その後、通学路の変更に伴う安全確保の要望等が各校区から出され、推進委員会が中心となり要望書の取りまとめや関係機関への要望書の提出を行ったが、表立った大きな反対や校区間の利害衝突という形に展開することはなかった。統廃合を進める学校及び行政側からの、校区間の競合意識への配慮は、校名選定及び校歌作成への配慮としても表出することになる。

3. 校 名

夢野の丘小学校の校名は、平成 20 年に統合される 4 つ校区の児童及び卒業生、さらには地元住民の意見を募集した上で、推進委員会と教育委員会での選考を経て、最終的には神戸市議会に提案され、決定した。

平成 20 年 7 月に発行された「統合だより 第 8 号」によれば、学校を通じて各校の児童、卒業生、保護者を対象として新校名の募集を行った。また地域住民も応募できるようにするため、地域福祉センターにも投票箱が設置された。そうして実施された校名募集に対して、応募総数 199 票、188 校名が寄せられたという。そのうち、推進委員会が候補校名として 20 件に絞り込んだものについて、保護者を対象としたアンケートを行ったところ、表 2 のような結果となった。

平成 20 年 7 月 24 日の推進委員会に報告された校名募集の集計結果からは、「四つ葉」が 70 票と最多得票数を得た一方で、「夢野の丘」は 21 票であり、全 20 候補の中で 5 位の得票数であった。新校名募集の主体となった推進委員会は、予め多数決による決定ではないという点を強調した上で、校名の募集及びアンケートを実施した。このことは、新校名策定の過程に住民が参加意識を持つための手続きである一方で、決定後に新校名への不満が出ないような配慮を行う余地を残

表 2 統合委員会によって公開され選考対象となった校名リスト

候補となった校名	得票数	校名の説明
神戸湊川	22	地名から・湊川のそばにあるのでわかりやすい
新湊川	34	新湊川の近く・新たな気持ちでスタートする・湊川にある新しい学校・川（自然）に親しむ
兵庫湊川	3	兵庫区で湊川のそばにあるので
湊川	28	昔からの地名・川の流れのように平和で和める学校・わかりやすい、覚えやすい、親しみがある
夢野の丘	21	子どもが夢を持ち、夢に向かって成長する学校に
北ひょうご	1	兵庫区の北部に位置するので・ひらがなで斬新さを
兵庫北	13	兵庫区の北部に位置するので・区民として「兵庫」という地名に親しみやすい
四つ葉	70	4 つの学校が一つになったという思い出を残す・幸福のシンボル
あおば	10	青々と生い茂る木の葉のように、子どもたちがどんどん育っていくように
あじさい	2	神戸市の花
のぞみ	4	夢いっぱい希望（のぞみ）をかなえる・のぞみを持ってほしい
すみれ	4	兵庫区の花（パンジー）から
神戸みらい	13	神戸の未来を担う子どもたちの学校・地名とイメージ
湊川中央	4	湊川の中央付近なので
湊川山手	7	地名から・兵庫区の山側の小学校
夢の街	5	夢あふれる学校に
湊川みらい	3	神戸の未来を担う子どもたちの学校・地名とイメージ
ひゆき	3	鶴越、東山の「ひ」、夢野の「ゆ」、菊水の「き」
水鳥の山	1	菊水の「水」、鶴越の「鳥」、夢野の「の」、東山の「山」・鳥が高い山を越えて渡っていく感じ

（※推進委員会における配付資料を元に筆者作成）

したと言える。新校名の選定過程においては、①合成地名や合成校名のようなものは避けたい、②かつて近隣地域に存在した学校名と同じ名称は避けたい、③歴史が長く住民の愛着が強い鶴越と菊水のどちらかの文字が残るような名称も避けたい、という 3 つの条件があったと田中氏は述べている。もし 2 校による統廃合であれば、合成校名もあり得たという。実際に、近年神戸市内で行われた 2 校による統廃合には、2 校の名称を合成した校名⁸⁾もあり、本章で取り上げた校名募集においても、旧校名を合成した候補が挙げられている。

アンケート結果と推進委員会による選考をふまえ、最終的に教育委員会が候補とした「夢野の丘」には、

「夢野小」の「夢野」が含まれている。統合された 4 校のうち、1 校の校名だけが残されることについての不満はなかったのか疑問が残るが、その点について、夢野小は統合された 4 つの小学校の中で最も新しい小学校だったために、菊水小及び鶴越小の住民から大きな不満が出されることはなかったと田中氏は述懐する。

新校名は最終的に、平成 20 年 10 月 14 日には神戸市教育委員会より発表された。選定理由として、①「子どもが夢を持ち、夢に向かって成長する学校」という願いを込めた、②校区には「夢野の丘」と称されていた地域があり、また旧夢野村（明治 29 年神戸市編入）の地域と校区とはほぼ重なる、③校名募集の結果、「夢野の丘」をはじめとして「夢」「夢野」を含む校名案が多数あった、という 3 点が挙げられている⁹⁾。

4. 校 歌

校歌に注目した研究は多くあるが、学校統廃合に伴う校歌の変更に着目することは少ない。たとえば丹間康仁（2012）による研究が見られるが、歌詞に現れた項目や情景を整理し、今後の研究課題を提示するにとどまっている。夢野の丘小学校及び統合された 4 校の校歌は、表 3 の通りである。

夢野の丘小学校の校歌を作詞した田中氏によれば、当初は、統合された 4 校をそれぞれに表すような内容を校歌に盛り込んでほしいという要望と、5 年 10 年と経てばなじんでいくので、4 校を表す内容にはこだわらなくてよいのではないか、という意見の両方があったという。過去に近隣で統合された学校の校歌の例もふまえながら、1 番の「長い歴史を受け継いで」、2 番の「新たな歴史を刻みつつ」という文言によって、統合を経て継承される歴史を表現した。当時の教育長の方針において夢というキーワードが示されていたこともあり、校名に含む夢の文字を軸として作詞したという。夢野の丘小学校に在籍する音楽専科の教員が作曲を担当し、複数の曲の候補から、教職員による投票を経て、校歌が決定された。当時を振り返って田中氏は、「地形や風景を入れても良かったかもしれないが、4 校のいずれかに偏らないことは強く意識した」と述懐している。

統合された小学校の校歌に用いられた地名に注目すると、菊水小と鶴越小の校歌には、それぞれ「夢野丘」「夢野の丘」が含まれている。前章では、校名選考を行う際に、とりわけこの 2 校への大きな「配慮」が意識されていたことを示したが、「夢野の丘」の名称は、地域の文脈に既に埋め込まれていたものであった、との見方も可能となる。

表 3 各校の校歌

<p>【菊水小学校校歌】</p> <p>1. 希望に明るく 夢野丘 行く手はるばる ちぬの海 ながめ妙なる 里に立つ この学びやぞ 母なれや</p> <p>2. 清き流れや 菊水の かわらぬ操を とりもちて まことつくさん 日を新た 進まん国の 民として</p> <p>3. 七つの海に つながりて 咲ける文化の 花むらを かおり豊けく つちかいて 世界の友に 分かつた</p>
<p>【鶴越小学校校歌】</p> <p>1. 暁の色 さわやかに 笹りんどうに 輝けば 鶴越のまなびやに 香ぐわしふた葉 萌えいずる</p> <p>2. 希望のともづな とく千船 扇の港虹の町 夢野の丘の下に見て 学ばわれらに 栄えあり</p> <p>3. まことを求め 身をきたえ 全き人となりゆかん 高き望みを 胸にしめ いざもろともに いそしまん</p>
<p>【東山小学校校歌】</p> <p>1. 仰ぐ青空 白い雲 山はみどりに どこまでも のぞみの虹を ふきあげて 海原におう 遠くから そよかぜにのって あふれくる 光にはずむ 東山校</p> <p>2. 国のほこりの 花の香を のせていつでも どこでも まぶたにうかぶ ひとすじの 流れが澄んだ 音立てる 陽のあたる窓はあかるくて 学びにはげむ 東山校</p>
<p>【夢野小学校校歌】</p> <p>1. 国際港都の海のなみ ポートタワーを下にみて きょうも きのうもはげみあう 希望あふれる 学び舎は 夢野 夢野 あ、母校</p> <p>2. 歴史も古きふるさとの 清い空の空のもと きょうも あしたもきたえあう 心豊かな学び舎は 夢野 夢野 あ、母校</p>
<p>【夢野の丘小学校校歌】</p> <p>1. 朝日かがやく夢野の丘に 明るい歌声ひびきあう 長い歴史を受け継いで 集う瞳は澄みわたり 豊かな心 明るい笑顔 高きをめざし 夢をもち 学ばわれらに希望あり</p> <p>2. 風吹きそよぐ夢野の丘に 元気なかけ声こだまする 新たな歴史を刻みつつ 集う瞳は輝いて 強い身体 みなぎる力 明日に向かって夢をもち 羽ばたくわれらに 未来あり</p>

※下線は筆者による。

5. 震災モニュメント

2013年現在、夢野の丘小学校のグラウンド南東端には、1995年に発生した阪神・淡路大震災に由来する2本の木が植えられている。うち一本は、「てんちの木」(写真1)と呼ばれるシモクレンである。阪神・淡路大震災によって、旧東山小学校に通っていた兄と妹を亡くした両親が、寄贈し、校舎の建て替えの際には移植され、現在に至っている¹⁰⁾。木は亡くなった児童の名字から名付けられており、毎年1月17日前後に、亡くなった児童の同級生が今もこの場所を訪れている¹¹⁾。

また「てんちの木」の東隣には、「いのちの木」(写真2)と呼ばれるアスナロが植えられている。阪神・淡路大震災によって亡くなった旧鶴越小学校の教諭の母親より寄贈された。この木の根元に据えられた銘板には「命の木(あすなろ) この木は、阪神淡路大震災で亡くなられた旧鶴越小学校吉岡眞治教諭のご母堂より、命の大切さを忘れない子どもに育ってほしいという願いをこめて、夢野の丘小学校に寄贈して頂きました。2011.4 吉岡君江様」と記されている。鶴越



写真1 右手前が「てんちの木」、左手奥が「命の木」



写真2 「てんちの木」の根本に置かれた石碑

小では、震災後、運動会の際に、勝った方には優勝旗を渡し、負けた側には吉岡教諭の名を冠したカップを渡すことを恒例としてきた。しかし統廃合を機に、カップが吉岡教諭の母親に返還され、その代わりに母親から植樹についての申し出があった¹²⁾。それが現在、「命の木」として植えられているものである。夢野の丘小学校では、毎年1月17日前後に、現在の全校児童に対して、この2本の木がどのような経緯で植えられたものであるのかについて説明する機会を設けている。関連行事として、児童たちが木の根元に土入れをする活動が行われており、震災を語り継ぐ手がかりとして位置づけられている。

震災を語り継ぐために活用されている2本の木は、東山小と鶴越小に由来するものであり、夢野小と菊水小に直接の縁はない。その点について、何らかの配慮が必要と考えていた田中氏は、「統合したら、どの学校であっても自分たちの先輩であり先生である」という説明を行い、教職員の了解を得たという。2本の木は、現在も夢野の丘小学校において震災を伝えるものとして明確に位置づけられている。

6. 結 論

ここまで、神戸市立夢野の丘小学校の開設に伴って取り組まれた新校名の選考と新校歌の制定、震災モニュメントの移設を取り上げ、それぞれの場面で発揮された各校区への配慮に注目してきた。

新校名の選考においては、最終的に「夢野の丘」の名称を選考した教育委員会は「昔からあった地名」という理由付けを行っているものの、歴史の長い菊水小と鶴越小への配慮をふまえたものであり、結果的に、歴史的には最も新しい夢野小の名を一部取り込む形で、新校名が制定された¹³⁾。新校名の選考は、校名募集及びアンケート調査によってボトムアップの民主的手続きを取るように見せつつ、最終的な決定権は教育委員会が保持する形で実施された。いかなる校名が最も妥当な名称であったのか、もしくは、いかなる方法によって校名を決めるべきかを検討することは本稿の課題ではないものの、夢野の丘という名称には、各校区からの不満をもたらさないための配慮が大きく影響していると言える。そのことは、校区間の対立や統廃合への反対の動きが表面化しないようにするための利害調整という側面がある一方で、単に行政から押しつけられた校名であると言い切ることも妥当ではない。教育委員会が示した、「旧夢野村の範囲と校区が概ね

一致する」という理由も、住民に対して説得力を持った可能性がある。それは、地域において親しまれてきた旧校名を取って新校名には取り込まないという配慮と、歴史的な文脈に添った地名を組み合わせるという配慮の結果であったと言える。

校歌の制定においては、統合された 4 校への配慮から、「いずれの固有名詞も盛り込まない」という条件の下で作詞された。それは、校名選考過程と同様に、各地域に固有の歴史的な文脈を強く意識した結果、個別の文脈からずらす方策が採用された結果であったと言える。統合後の夢野の丘小学校は、地域的な文脈から完全に切り離されるわけではなく、「歴史を受け継ぐ」という歌詞に示されるように、各地域への配慮を行いながら、地域の文脈を取捨選択していると言える。それは、阪神・淡路大震災に由来する 2 本の樹木を位置づけた「統合前の学校は、すべて自分たちの先輩であり先生である」という論理にも関連している。行政側による地域間の利害を調整するような配慮に添いつつ、統合後の学校が各校の歴史的な文脈を取捨選択し再構築している、と整理することができよう。

以上のように、本稿では、学校統廃合をめぐる、各地域に固有の文脈をずらしながらも寄り添うための配慮に注目してきた。その結果、統合前の各校に固有の歴史的な文脈が取捨選択されつつ、新校名や新校歌、震災モニュメントの継承など、学校を構成する要素が再構築されていく状況を明らかにすることができた。この事例のみをもって学校と地域社会が相互につながりあう「まとまり」を理解する普遍的な視座とすることはできないが、今後、類似の事例を取り上げながら、学校と地域社会が相互に構築する地域的な文脈とそれを基盤とした諸実践に注目していきたいと考えている。

付記

本稿の執筆のための資料収集及び聞き取り調査においては、甲南女子大学人間科学部教授の田中稔先生及び神戸市立夢野の丘小学校校長の山本正実先生には、大変お世話になった。期して感謝したい。

注

- 1) 行き過ぎた統廃合があるのではないかとの批判に関しては、新校舎建設のための国庫補助率が高く設定されていることが影響しているとの指摘もある。安田隆子 (2009) 参照。
- 2) 平成 20 年 10 月 14 日神戸市教育委員会事務局総務部

学校再開発・振興室作成記者発表資料より。

- 3) 平成 21 年 3 月 7 日に開催された合同閉校記念式典において配付されたパンフレット「平成 20 年度 閉校記念誌」参照。
- 4) 同上。
- 5) 田中氏への聞き取りより。
- 6) ふれあいのまちづくり協議会は、平成 2 年に神戸市において制定された「神戸市ふれあいのまちづくり条例」に基づいて、おおむね 1 小学校区に 1 つずつ設置された地域福祉センターを運営し、地域福祉活動を推進する団体。一般財団法人地域活性化センター『月刊地域づくり』平成 17 年 12 月特集コンパクトなまちづくり (<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/monthly/0512/html/t08.html>, 2013 年 10 月 12 日閲覧) 参照。
- 7) 田中氏への聞き取りより。
- 8) 神戸市須磨区の千歳小学校と大黒小学校は平成 14 年に合併してだいちょう小学校となった。
- 9) 平成 20 年 10 月 14 日、教育委員会事務局総務部学校再開発・振興室作成の記者発表資料より。
- 10) 2004 年 1 月 16 日読売新聞参照。
- 11) 田中氏への聞き取りより。
- 12) 田中氏への聞き取りより。
- 13) これについては、夢野小が設立された際の校名選定においてどのような議論が行われたのかについても確認する必要があるが、その点は別稿にて検討したい。

参考文献

- 「郷土」研究会編『郷土－表象と実践－』嵯峨野書院, 2003 年
- 進藤兵・山本由美・安達智則『学校統廃合に負けない！－小さくてもきりと輝く学校をめざして－』花伝社, 2005 年
- 丹間康仁「学校統廃合にともなう校名と校歌の変更をめぐる論点－茨城県大子町における統合事例から－」筑波大学「地域と教育」研究会報(3), 2012 年, pp.34-43
- 月原敏博・大須賀千種「校歌で何を歌うか?－福井県内小学校の校歌と地域環境－」福井大学教育地域科学部紀要 (1), 2011 年, pp.168-180
- 成田龍一『「故郷」という物語－都市空間の歴史学－』吉川弘文館, 1998 年
- 安田隆子「学校統廃合－公立小中学校に係る諸問題－」『調査と情報』640 号, 2009 年, pp.1-10
- 山下晃一「学校統廃合をめぐる政策研究課題の今日的再検討」(三上和夫・湯田拓史編『地域教育の構想』同時代社, 2010 年, pp.73-91)
- 山本由美『学力テスト体制とは何か－学力テスト・学校統廃合・小中一貫教育－』花伝社, 2009 年
- 湯田拓史『都市の学校設置過程の研究－阪神間文教地区の成立－』同時代社, 2010 年
- 若林敬子『学校統廃合の社会学的研究』お茶の水書房, 1999 年